九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 自尊感情と自己認知との関係性 : 他者からみられている自己に着目して

藤瀬, 文子
九州大学大学院人間環境学府

古川, 久敬
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/15696

出版情報：九州大学心理学研究. 6, pp.189-197, 2005-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

Kyushu University Psychological Research
2005, Vol.6, 189-197

# 自尊感情と自己認知との関係性[1)]

## ──他者からみられている自己に着目して──

藤瀬　文子　九州大学大学院人間環境学府
古川　久敬　九州大学大学院人間環境学研究院

**Relating self-cognition to self-esteem**
**──Examining self-cognitions from the perspectives of others──**

Fumiko Fujise (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)
Hisataka Furukawa (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

Self-esteem is associated with positive self-cognition. Previously, self-cognition was represented by how the "actual" self was discrepant from the "ideal" self. These cognitions were assessed individually as "what I am " and "what I would like to be." In this study, we paid attention to self-cognition based on "being perceived by others" as a new criterion of self-cognition. Specifically, these cognitions were assessed individually as "I am perceived by others as what I am" and "I am perceived by others as what I would like to be." The discrepancies between these two kinds of self-cognition and "actual" self were calculated, and the relationships between these three discrepancies and self-esteem were examined. Further, the moderating effects of public and private self-consciousness on the relationships were analyzed. Results again confirmed the fact that self-cognition, based on the discrepancy between ideal and actual self, was strongly related to self-esteem. Moreover, self-cognition based on "being perceived by others" was found to be significantly related to self-esteem. These relationships were stronger for subjects with private self-consciousness.

**Keywords**: self-esteem, self-cognition, self-consciousness, perspective of others

## 問　題

本研究では，新たに“他者から見られている自分の姿”に着目し，自尊感情と自己認知との関係を検討することを目的とする。

自分を好ましい人間，あるいは価値ある存在として捉えることは，精神的健康において重要である。この自己に対する肯定的な感情的評価をあらわす自尊感情が高い人ほど，社会的スキルが高く，より適応的な向社会的行動を取りやすく (Rosenberg, 1965; Baston, Bolen, Cross, & Neuringre-Benefiel, 1986; 遠藤辰雄・井上・蘭，1992)，良好な人間関係を築くなど（菅，1975），さまざまな望ましい特徴と結びつくことが多くの研究で示されている。

### 自尊感情と自己認知との関係

遠藤由美（1999）は，自尊感情を，自分がどのような人間であるかの理解あるいは知識の上に成り立った自分自身の評価である，と定義している。この定義が示すように，自尊感情の高さは，自らをどのように理解・認知しているのか，その自己認知と密接な関係にある。また，特に自尊感情の高さはポジティブな自己認知に基づくことが指摘されている (e.g., Rosenberg, 1965; Higgins, Klein, & Strauman, 1985; 遠藤由美，1999)。近年では，現在の自分が理想とする自分の姿をどのくらい実現しているのか，その実現の程度よりポジティブな自己認知を定義し，自尊感情の高さとの関係について検討されている (e.g., Moretti & Higgins, 1990; 遠藤由美，1992a; 田中・天貝，2003)。理想とする自分の姿に着目したこれらの研究は，現在の自己の姿をどの程度肯定的に見ているのか，その内的基準を個人内目標として明示している。すなわち，自尊感情の高さに影響を及ぼすポジティブな自己認知を，理想自己を評価基準とした現実自己評価の観点から明らかにしている。

理想自己に着目した先行研究では，次のことが明らかになっている。まず，現実自己が理想自己に近いほど，自尊感情が高いことが示されている (Moretti & Higgins, 1990; 遠藤由美，1992a)。さらに，遠藤由美（1987）は，目標への接近回避の方向性に着目し，かくありたい姿としての理想自己（正の理想自己）とかくありたくない姿としての理想自己（負の理想自己）の２側面より理想自己を取り上げている。そして，正の理想自己と現実自己，負の理想自己と現実自己との関係を比較した場合，

[1)] 本論文の一部は日本社会心理学会第44回大会にて発表された。

現実自己がいかに負の理想自己からかけ離れているかが，自尊感情の高さに影響を及ぼすことを明らかにしている(遠藤由美，1992b)。これらの研究は，理想自己を基準としたポジティブな自己認知が，自尊感情の高さに影響することを示している。

しかし，それと同時に，自己が他者との交わりの中でも形成されるという点に着眼すると，ポジティブな自己認知は，必ずしも自らが描く（本人視点）理想自己と現実自己との関係だけから示されるとは限らないだろう。人は，他者にポジティブな印象を与えようと働きかけ，他者に示した自らの姿を他者が受け入れたと思うとき，その特性が自らの特徴の１つであると認識する。Leary (1983)は，その繰り返しが自己認知形成のプロセスであることを指摘している。これは，他者との相互作用によって自己は形成されることを示唆するものである。言い換えると，他者との関わりに基づいて形成された自己も，自己認知の重要な側面と言えるだろう。そこで本研究では，ポジティブな自己認知における評価基準の１つとして他者に捉えられていると個人が考える自分の姿（他者視点）に着目する。

自尊感情と自己認知との関係を検討した従来の研究のうち，他者との関わりに基づいて形成された自己に着目した研究として，Moretti & Higgins (1990) のものが挙げられる。Moretti & Higgins は，理想自己を捉える視点の１つとして他者視点に着目している。そして，理想自己に近い現実自己を描いている人ほど自尊感情が高いという従来の知見を支持している。しかし彼らの研究では，他者視点と本人視点の両方から理想自己を捉えていたものの，各被験者において現実自己からよりかけ離れている方だけを，評価基準として用いている。よって，他者視点の理想自己を基準とした本人視点の現実自己評価が，自尊感情の高さに及ぼす影響については定かではない。これはセルフ・ディスクレパンシー理論(Higgins, 1987) に基づき，他者視点を想定し，自己をみつめる視点を拡大しているに過ぎなかった。つまり，他者視点から評価基準を取り上げる重要性を考慮しているものの，自尊感情と自己認知との関係を検討する上で，他者視点の理想自己を捉えることの効果については，軽視されている。そこで，本研究では，本人視点，他者視点の両視点の理想自己を基準とした現実自己評価が自尊感情に及ぼす影響について比較検討する。

また他者視点は，理想自己を捉えるだけに留まっている。しかし，現在の自分が他者からどのようにみられているかもまた，自己認知の重要な側面と考えられる。したがって，他者に描かれていると思われる現在の自分の姿も現実自己の評価基準となりうるだろう。よって本研究では，他者に描かれていると思われる現在の自分の姿を他者視点の現実自己とし，それを基準とした本人視点の現実自己評価が，自尊感情に及ぼす影響についても検討する。

以上より，本研究では本人視点の現実自己の評価基準として，本人視点の理想自己，他者視点の現実自己，他者視点の理想自己の３つの自己に着目する[2]。これらを図示すると，Fig.1のようになる。本研究では，各自己を基準とした現実自己評価として，その差異（discrepancy）に着目する。よって，本人視点の理想自己，他者視点の現実自己，他者視点の理想自己の各評価基準による現実自己評価を，以下ではD-Ⅰ，D-Ⅱ，D-Ⅲとして表す[3]。さらに，理想自己については正の側面と負の側面から取り上げる。すなわち，本研究で着目する自己認知とは，本人視点において，“私は～である”として表される本人視点の現実自己，“私は～になりたい”として表される本人視点の正の理想自己，“私は～になりたくない”として表される本人視点の負の理想自己の３つの自己である。他方，他者視点において，“私は～とみられている”として表される他者視点の現実自己，“私は～になってほしいと思われている”として表される他者視点の理想自己，“私は～になってほしくないと思われている”として表される他者視点の負の理想自己の３つの自己である。よって，本人視点，他者視点を合わせて６つの自己に着目する。

以上の議論から，仮説は，以下のように予測される。

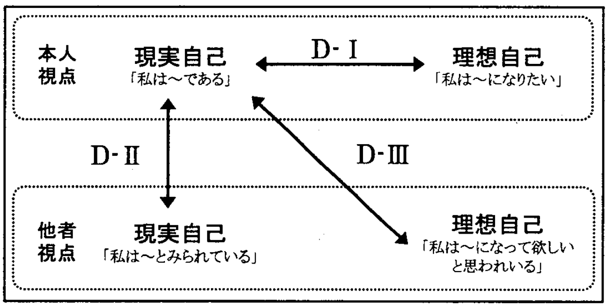


**Fig.1** 本研究における４つの自己とその間の差異

[2] ところで，評価基準として他者視点をどのように捉えるのかは重要である。他者は，両親，学校の教師，配偶者，親密な友人などの重要な他者と，単なるクラスメイトや職場や仕事上のつきあいしかない人など表面的な関わりしかもたない他者との２つに大きく分けられる（榎本，1998)。先行研究では，他者視点として母親，父親，配偶者，親密な友人など，重要な他者が“他者”として扱われている（e.g., Moretti & Higgins, 1990)。しかし，自己認知の形成に関わる他者とは，重要な他者には限定されないと考えられる。そこで本研究では，他者視点の他者として，重要な他者に限定されない，より広義での他者に注目する。

[3] D-Ⅰ，D-Ⅱ，D-ⅢのDは，Discrepancy の頭文字，“D”を表す。

**仮説1**　他者視点の現実自己を基準とした本人視点の現実自己評価と本人視点の理想自己を基準としたそれは，それぞれ自尊感情の高さに影響を及ぼすだろう。

**仮説2**　各自己を基準とした本人視点の現実自己評価において，正の側面と負の側面とでは，負の側面からの評価のほうが，自尊感情に影響を及ぼすだろう。

### 自尊感情と自己認知との関係における自意識の影響

先に，他者視点に着目して自己認知と自尊感情との関係を検討することの必要性を述べた。先述のとおり，人は自らの理想や他者との相互作用を通して自己を認知し，またその認知に基づき現在の自己状態を評価している。しかし，人は，すべての評価基準に基づく現実自己評価に敏感なわけではなく，重要な評価基準については個人によって異なると考えられる。本研究では，その違いを検討するために，自意識に着目する。

自意識は，自己に対する注意の向けやすさの個人差と定義され，注意の向けやすい方向により公的自意識と私的自意識の2つに区別される（Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975）。自意識の方向性の違いは，認知的側面に異なる影響を及ぼすことが示されている（e.g., Fenigstein, 1979; 菅原，1984; 押見・渡辺・石川，1985）。例えば，他者から観察可能な行動や外見に対する意識である公的自意識が高いと，人は対人不安や自己顕示性が高く（菅原，1984），他者からの評価や拒否的態度に対して敏感である（Fenigstein, 1979）。それに対し，性格など自己の内面に対する意識である私的自意識が高いと，先の公的自意識が高い人が示したような傾向は見られない。すなわち，自意識傾向が異なれば，自尊感情の高さと自己認知との関係もまた異なるだろう。特に，公的自意識の高さは，他者の存在に対する敏感さに関係すると考えられる。

これまでの自尊感情と自己認知との関係を検討した研究では，自意識をはじめとした自己に対する注意の方向性についての個人傾向を捉える視座が看過されている。しかし，先に述べた特徴を踏まえると，他者視点に基づく自己を基準とした現実自己評価と自尊感情との関係は，自意識の影響を受けると考えられる。さらにその特徴より，公的自意識の高さが，他者視点の現実自己，及び他者視点の理想自己に基づく本人視点の現実自己評価と自尊感情の高さとの関係に影響を及ぼすと考えられる。

したがって仮説は，以下のように予測される。

**仮説3**　私的自意識に比べ公的自意識が高い人において，他者視点の理想自己を基準とした現実自己評価と他者視点の現実自己を基準としたそれは，自尊感情の高さに影響を及ぼすだろう。

**仮説4**　公的自意識に比べ私的自意識が高い人において，本人視点の理想自己を基準とした本人視点の現実自己評価が自尊感情の高さに影響を及ぼすだろう。

## 方　法

### 調査対象

A大学の学部学生461名（有効回答数435名）であった。

### 調査時期

2002年10月下旬～11月中旬にかけて調査を実施した。

### 実施方法

質問紙法を用いた。調査は，調査対象者が受講する授業の時間中に集団で実施された。質問項目への回答に許される時間には制限を設けず，調査対象者のペースに委ねた。実際に要した時間は，およそ20～30分程度であった。

### 質問紙構成

**自己認知尺度**　遠藤由美（1992b），林・宮本（1999）の尺度を参考にし，正の側面20項目（P項目）と負の側面20項目（N項目）からなる40項目から構成した。また，自己の側面の偏りのないように，8領域（学業，家族関係，対人関係，パーソナリティ・ライフスタイル，資産／物質，身体）から構成した（項目内容については付録1を参照のこと）[4]。現実自己はP項目及びN項目の計40項目を用い，理想自己はP項目で正の理想自己を，N項目で負の理想自己を測定した。したがって，総項目数は，160項目であった。各項目に対し，“あてはまる”(5)から“あてはまらない”(1)までの5件法で評定を求めた。以下は，各自己の測定における教示を示す。

**本人視点の現実自己：**「次の各項目について，どの程度あなたにあてはまると思いますか」という教示のもとに回答を求めた（40項目）。

**本人視点の正の理想自己：**「あなたは，次の項目があらわすような人間にどの程度なりたいと思いますか」という教示のもとに回答を求めた（20項目）。

**本人視点の負の理想自己：**「あなたは，次の項目があらわすような人間にどの程度なりたくないと思いますか」という教示のもとに回答を求めた（20項目）。

**他者視点の現実自己：**「次について，周囲の人達はどの程度あなたにあてはまると思っていますか」という教示のもとに回答を求めた（40項目）。

**他者視点の正の理想自己：**「あなたの周囲の人達は，次の項目が表すような人間に，どの程度（あなたに）なって欲しいと思っていますか。」という教示のもとに回答を求めた（20項目）。

---

[4] 各項目については，予備調査の結果に基づき決定された。具体的には，各領域を示す項目であることを確認するために，ランダムに並べた項目を各領域に当てはめてもらう作業を実施した。協力者は，心理学研究室に所属する大学生8名であった。利用項目の決定においては，7名以上の一致率とした。

**他者視点の負の理想自己**：「あなたの周囲の人達は，次の項目が表すような人間にどの程度(あなたに)なって欲しくないと思っていますか」という教示のもとに回答を求めた（20項目)。

**自尊感情尺度** Rosenberg（1965）の Self-esteem 尺度の翻訳版（山本・松井・山成，1982）を用いた。尺度は，「少なくとも人並みには，価値のある人間である」，「いろいろよい素質をもっている」など，10項目から構成されている。各項目に対し，“あてはまる”(5)から“あてはまらない”(1)の5件法で評定を求めた。

**自意識尺度** Fenigstein et al.(1975）に基づく菅原(1984）の日本語版を用いた。尺度は，「自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる」など公的自意識に関する11項目，及び「自分がどんな人間か自覚しようと努めている」など私的自意識に関する10項目から構成されている。各項目に対し，“非常にあてはまる”(7)から“全くあてはまらない”(1)の7件法で評定を求めた。

**各評価基準に基づく本人視点の現実自己評価得点の算出** まず，各評価基準に基づく本人視点の現実自己評価は，次のように示す。本人視点の理想自己を基準とした変数について，正の側面についてはDp-Ⅰ，負の側面についてはDn-Ⅰと示した。また他者視点の現実自己を基準とした変数について，正の側面についてはDp-Ⅱ，負の側面についてはDn-Ⅱと示した。さらに他者視点の理想自己を基準とした変数については，正の側面をDp-Ⅲとし，負の側面をDn-Ⅲとした。その上で，遠藤由美(1992a）を参照し，各変数の得点を求めた。例えば，正の側面については，次式を用いた： $Dp=\sqrt{\sum dp^2}$。

## 結　果

まず自己認知の各側面における記述統計量を，Table 1に示す。以下，分析結果について述べる。

**自己像間の差異と自尊感情との関係**

**Table 1**
各自己，自尊感情，自意識の平均，及び標準偏差

| | | 全体（*N*=435） | | 公的自意識群（*N*=235） | | 私的自意識群（*N*=198） | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | *M* | *SD* | *M* | *SD* | *M* | *SD* |
| 本人視点 | 現実自己 | 3.19 | .36 | 3.27 | .33 | 3.10 | .38 |
| | 理想自己 | 4.24 | .54 | 4.26 | .56 | 4.22 | .52 |
| 他者視点 | 現実自己 | 3.28 | .36 | 3.42 | .33 | 3.09 | .31 |
| | 理想自己 | 3.85 | .61 | 3.88 | .65 | 3.81 | .57 |
| 自尊感情 | | 3.14 | .70 | 3.11 | .73 | 3.18 | .67 |
| 自意識 | 公的自意識 | 4.99 | .97 | 5.40 | .78 | 4.49 | .94 |
| | 私的自意識 | 4.93 | 1.02 | 4.46 | .92 | 5.50 | .84 |

注1）自意識の中央値は4.00である．
注2）N項目は逆転処理し，加算した．

**Table 2**
自己像間の差異と自尊感情との関係（*N*=435）

| | *M* | *SD* | 1. | 2. | 3. | 4. | 5. | 6. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1. 自尊感情 | 3.14 | .70 | | | | | | |
| 2. Dp-Ⅰ | 7.01 | 2.08 | −.41*** | | | | | |
| 3. Dn-Ⅰ | 8.74 | 2.46 | .32*** | .08 | | | | |
| 4. Dp-Ⅱ | 4.49 | 1.61 | .06 | .26*** | .22*** | | | |
| 5. Dn-Ⅱ | 4.78 | 1.69 | .00 | .24*** | .28*** | .70*** | | |
| 6. Dp-Ⅲ | 6.20 | 1.98 | −.22*** | .67*** | .21*** | .34*** | .31*** | |
| 7. Dn-Ⅲ | 7.66 | 2.46 | .24*** | .09 | .76*** | .23*** | .28*** | .29*** |

注1）***$p$<.001
注2）D-ⅠはAは本人視点の理想自己を基準とした本人視点の現実自己評価を，そしてD-Ⅱは他者視点の現実自己を基準とした本人視点の現実自己評価を，さらにD-Ⅲは他者視点の理想自己を基準とした本人視点の現実自己評価を表している．また，pはそのうちの正の側面を，nは負の側面を表している．

まず自尊感情と各評価基準に基づく本人視点の現実自己評価との関係を検討するために，自尊感情得点と各変数（Dp-Ⅰ，Dn-Ⅰ，Dp-Ⅱ，Dn-Ⅱ，Dp-Ⅲ，Dn-Ⅲ）との相関係数を算出した。その結果を，Table 2 に示す。

さらに，自尊感情に対する，各自己を評価基準とした本人視点の現実自己評価の影響を検討するために，自尊感情得点を基準変数，Dp-Ⅰ，Dn-Ⅰ，Dp-Ⅱ，Dn-Ⅱ，Dp-Ⅲ，Dn-Ⅲを説明変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った。その結果を Table 3 に示す。分析の結果，各変数の標準化偏回帰係数（$\beta$）の値を見ると，Dp-Ⅰ，Dn-Ⅰ，Dp-Ⅱ，Dn-Ⅱにおいて自尊感情と有意な関係であることが示された。一方，Dp-Ⅲ，Dn-Ⅲは，有意な関係ではなかった。また有意であった 4 変数の標準化偏回帰係数（$\beta$）より，自尊感情との関係は，Dp-Ⅰ，Dn-Ⅰ，Dp-Ⅱ，Dn-Ⅱの順に強いことが示された。なお，重決定係数（調整済み $R^2$）は.308であった（$F_{(6, 328)}=$ 33.13, $p<.001$）。

**自意識特性が自尊感情と自己像間の差異との関係に及ぼす影響**

さらに，自尊感情と自己認知との関係性において，自意識がどのように関わっているかを検討した。この分析を行うために，調査対象者ごとに公的自意識得点及び私的自意識得点の平均値を算出した。そして，両平均値のうち値の高い方をその個人のより強い特性とし，公的自意識群と私的自意識群とに割り当てた[5]。なお，公的自意識群は235名，私的自意識群は198名であった。

まず公的自意識群，私的自意識群それぞれにおいて自尊感情得点と Dp-Ⅰ，Dn-Ⅰ，Dp-Ⅱ，Dn-Ⅱ，Dp-Ⅲ，Dn-Ⅲとの相関係数を算出した（分析結果は，付録 2 及び付録 3 を参照のこと）。

さらに，自尊感情に対する，各自己を評価基準とした本人視点の現実自己評価の影響について検討するために，各群において，自尊感情得点を基準変数，Dp-Ⅰ，Dn-Ⅰ，Dp-Ⅱ，Dn-Ⅱ，Dp-Ⅲ，Dn-Ⅲを説明変数とした重回帰分析（強制投入法）をおこなった。その結果を，Table 3 に示す。それによると，両群において自尊感情に反映される変数が異なることが示された。以下に，各群における結果の詳細を示す。

**Table 3**
**自尊感情を基準変数とした重回帰分析**

| 説明変数 | 全体 | 公的自意識群 | 私的自意識群 |
|---|---|---|---|
| | $\beta$ | $\beta$ | $\beta$ |
| Dp-Ⅰ | −.450*** | −.494*** | −.368*** |
| Dn-Ⅰ | .342*** | .324*** | .415*** |
| Dp-Ⅱ | .187** | .031 | .388*** |
| Dn-Ⅱ | −.112* | .005 | −.244** |
| Dp-Ⅲ | −.023 | −.008 | −.078 |
| Dn-Ⅲ | .018 | .014 | .017 |
| 調整済み$R^2$ | .308*** | .311*** | .334*** |

注）* $p<.05$,　** $p<.01$,　*** $p<.001$

[5] Fenigstein et al.(1975)は，自意識を特性として捉えている。また自意識はその根底に「単一焦点化仮説」という共通仮説が存在すると指摘されている（辻，1993)。つまり，人は注意の焦点を同時に，自己の外的部分と内面にむけることはなく，1 つに限ることで対象の情報処理を可能にしていると考えられている。このことから，個人特性として自意識を捉える場合，尺度得点の平均値を基準に被験者を群わけするのではなく，各被験者の 2 つの自意識得点に基づき，高い方が個人傾向を示すものとして群わけすることが妥当であると考えられる。なお，公的自意識得点，及び私的自意識得点の平均値が同値であった調査対象者は，以後の分析から除外した。両群における公的自意識得点と私的自意識得点には有意な差がみられた（$t_{(431)}$=11.06, $p<.001$; $t_{(431)}$=12.18, $p<.001$)。

**公的自意識群における自尊感情と自己像間の差異との関係**　公的自意識群について，各変数の標準化偏回帰係数（$\beta$）より，Dp-Ⅰ，Dn-Ⅰにおいて自尊感情と有意な関係であることが示された。しかし，Dp-Ⅱ，Dn-Ⅱ，Dp-Ⅲ，Dn-Ⅲについては，自尊感情との有意な関係は示されなかった。また有意であった 2 変数の標準化偏回帰係数（$\beta$）より，Dp-Ⅰ，Dn-Ⅰの順に自尊感情との関係が強いことが示された。なお，重決定係数（調整済み R2）は.311であった（$F_{(6, 228)}=$ 18.64, $p<.001$）。

**私的自意識群における自尊感情と自己像間の差異との関係**　私的自意識群について，各変数の標準化偏回帰係数（$\beta$）より，Dp-Ⅰ，Dn-Ⅰ，Dp-Ⅱ，Dn-Ⅱの 4 変数において自尊感情と有意な関係であることが示された。しかし，Dp-Ⅲ，Dn-Ⅲについては，自尊感情との有意な関係は示されなかった。また，有意であった 4 変数の標準化偏回帰係数（$\beta$）より，Dn-Ⅰ，Dp-Ⅱ，Dp-Ⅰ，Dn-Ⅱの順に自尊感情との関係が強いことが示された。なお，重決定係数（調整済み $R^2$）は.334であった（$F_{(6, 191)}=$ 17.17, $p<.001$）。

## 考　察

本研究では，“他者からみられている自分の姿”に着目し，自尊感情と自己認知との関係を検討した。本研究の目的は，第 1 に他者の視点から捉えた自己を基準とした本人視点の現実自己評価の高さが自尊感情に及ぼす影響を明らかにすることであった。さらに第 2 点目として，自意識に着目することで，自己認知と自尊感情との関係を捉える上で他者視点を用いることの効果を検討することであった。以下では，仮説に沿って結果の考察を行う。

第1に，他者視点に基づく自己を評価基準とした本人視点の現実自己評価に着目し，自尊感情と自己認知との関係について検討するために，2つの仮説を立てた。まず仮説1では，他者視点の現実自己を基準とした本人視点の現実自己評価と本人視点の理想自己を基準とした本人視点の現実自己評価は，それぞれ自尊感情の高さに影響を及ぼすという予測を立てた。結果は，仮説1を支持した。すなわち，本人視点の理想自己を基準とした本人視点の現実自己評価だけでなく，他者視点の現実自己を基準とした本人視点の現実自己評価も，自尊感情の高さに影響を及ぼすことが示された。一方，他者視点の理想自己を基準とした本人視点の現実自己評価については，自尊感情との有意な関係は示されなかった。先行研究では，本人視点の現実自己評価の基準として理想自己のみに着目していた（e.g., Moretti & Higgins, 1990; 遠藤由美，1992a; 田中・天貝，2003）。よって，他者視点の現実自己を評価基準とした本人視点の現実自己評価が自尊感情の高さに影響を及ぼすという本研究の結果は，ポジティブな自己認知の捉え方に対し，新たな知見をもたらすものである。ただし，自尊感情に対する影響力に着目すると，先行研究で取り上げられてきた本人視点の理想自己の方が強いという点を踏まえる必要があるだろう。さらに，他者視点の現実自己を評価基準とした場合と他者視点の理想自己を評価基準とした場合とでは，前者のみ自尊感情に影響を及ぼすという結果が示された。すなわち，人は他者視点を自己認知のポジティブな程度を捉える1つの指標としているものの，“他者から見られている現在の自分の姿”と，“他者にとって望ましい自分の姿”では，自尊感情への影響が異なることを示唆するものである。

さらに仮説2では，各自己を基準とした本人視点の現実自己評価において，正の側面と負の側面とでは，負の側面からの評価の方が自尊感情に影響を及ぼすという予測を立てた。結果は，自尊感情との有意な関係が示された本人視点の理想自己を基準とした本人視点の現実自己評価，及び他者視点の現実自己を基準とした本人視点の現実自己評価ともに，正の側面の方が自尊感情の高さに影響を及ぼしていることを示していた。よって，仮説2は支持されなかった。先行研究では，正負のいずれの側面が自尊感情により影響を及ぼすのかについては，一貫した結果が見られない（e.g., 遠藤由美，1992b; 田中・天貝，2003）。本研究の結果は，田中・天貝の結果を支持するものであった。田中・天貝は，正の側面において自尊感情との関係が強かった理由について，遠藤由美（1992a）の調査からの時間経過に伴い，現在の大学生がよりポジティブな自己に対する欲求が高まった可能性を指摘している。また他方では，自尊感情は，個人にとって重要な自己認知の側面からより強い影響を受けることから（遠藤由美，1992a; 溝上，1999），本研究で取り上げた自己認知の側面が，今日の大学生にとっての重要な領域をうまく捉えられていなかった可能性も否定できない。いずれにせよ，この点については今後さらに検討する必要があるだろう。

さらに第2として，自意識に着目し，自己認知と自尊感情との関係を検討した。まず仮説3として，私的自意識より公的自意識が高い人において，他者視点の理想自己を基準とした現実自己評価と他者視点の現実自己を基準としたそれは，自尊感情の高さに影響を及ぼすという予測を立てた。結果は，正の側面，負の側面ともに，本人視点の理想自己を基準とした本人視点の現実自己評価が，自尊感情の高さに影響を及ぼすことを示していた。よって，仮説は部分的に支持された。本研究では，他者からの評価や拒否的態度に対して敏感である（Fenigstein, 1979）という公的自意識の特徴から，他者視点の現実自己を基準とした本人視点の現実自己評価についても自尊感情に影響を及ぼすと予測したが，そのような結果は示されなかった。また，先行研究を概観すると，公的自意識が高い人は，他者に同調的な行動を強く示すことや（Forming & Carver, 1981），他者から期待された役割に適応的な行動を取ることが明らかにされている（Scheier, Carver, & Gibbons, 1979; Schlenker & Weigold, 1990）。このことから，公的自意識の高い人が，他者から影響を受けやすいのは，他者との相互作用場面に限られたものである可能性が考えられる。

また仮説4として，公的自意識より私的自意識が高い人において，本人視点の理想自己を基準とした本人視点の現実自己評価が自尊感情の高さに影響を及ぼすと予測した。分析の結果，正の側面，負の側面ともに，本人視点の理想自己を基準とした本人視点の現実自己評価と，他者視点の現実自己を基準とした本人視点の現実自己評価が，自尊感情の高さに影響を及ぼしていることが示された。よって，仮説は部分的に支持された。私的自意識が高い人において，他者視点の現実自己を基準とした本人視点の現実自己評価が自尊感情に影響を及ぼしていた点は，本研究の予測と異なる。私的自意識が高い人は，自分についての知識が豊富であることが示唆されている（Scheier & Carver, 1977）。先述のとおり，本研究で取り上げた“他者から見られている自分の姿”は，本人の認知である。私的自意識が高い人は，自己についての知識が豊富であるり，そのために他者視点の現実自己と比較した現実自己評価に敏感であったことが考えられる。

以上のとおり，本研究では，他者から見られている自己を評価基準として新たに取り上げ，自尊感情とポジティブな自己認知との関係を検討した。そして，自尊感情に影響を及ぼす自己認知とは，自らがどのような人間でありたいのか，その理想とする姿と照らし合わせた現在の

自分の評価だけではないことが明らかになった。言い換えれば，他者から見られている姿を想定し，それと照らし合わせた現在の自分に対する評価についても，自尊感情の高さに影響を及ぼしていることが示された。さらに，自尊感情と自己認知との関係は，自己への注意の向け方によって異なることが示された。従来，公的自意識は，自己の外的側面への注意の高まりであると指摘されてきた。それに対し，公的自意識は自己への注意の焦点づけではなく他者への注意や関心であるとの指摘もなされている（Gibbons, 1990）。本研究の結果は，こうした自意識概念の特徴を反映したものと考えられる。

近年，「自己」が現実世界の社会的状況や人間関係から切り離されて検討されている傾向を危惧し，他者とのかかわりの中での自己という観点から自尊感情を捉える必要性が指摘されている（遠藤由美，1999）。本研究では，自己認知において他者を想定することで，自尊感情に影響を及ぼす自己認知の新たな側面を明らかにした。このことは，自尊感情と自己認知側面との関係を検討していく上で，他者とのかかわりの中で形成された自己を捉えることの重要性を示唆するものと考えられる。


## 謝辞

本論文は，第1著者が2002年度新潟大学教育人間科学部学習社会ネットワーク課程卒業論文として提出したものの一部を加筆・修正したものである。本論文の作成にあたり，ご指導賜りました新潟大学教育人間科学部教授大浦容子先生，九州大学大学院人間環境学研究院助教授山口裕幸先生をはじめ，貴重なご助言をいただきました先輩方に深謝いたします。


## 引用文献


Baston, C. D., Bolen, J. G., Cross, J. A., & Neuringre-Benefiel, H. E. 1986 Where is the altruism in the altruistic personality？ *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 212-220.

遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽（編） 1992 セルフ・エスティームの心理学―自己価値の探求― ナカニシヤ出版

遠藤由美 1987 特性情報の処理における理想自己 心理学研究，**58**, 289-294.

遠藤由美 1992a 自己認知と自己評価の関係―重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討― 教育心理学研究，**40**, 157-163.

遠藤由美 1992b 自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究，**63**, 214-217.

遠藤由美 1999 「自尊感情」を関係性からとらえ直す 実験社会心理学研究，**39**, 150-167.

榎本博明 1998 「自己」の心理学 ―自分探しへの誘い― サイエンス社

Fenigstein, A 1979 Self-consciousness, self-attention, and interaction. *Journal of Personality and Social Psychology,* **37**, 75-86.

Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.

Forming, W. J., & Carver, S. C. 1981 Divergent influences of private and public self-consciousness in a compliance paradigm. *Journal of Research in Personality*, **15**, 159-171.

Gibbons, F. X. 1990 Self-attention and behavior: A review and theoretical update. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology,* Vol.23. CA: Academic Press. Pp.249-303.

林恵美・宮本正一 1999 不適応指標としての理想自己と現実自己のズレ 岐阜大学教育学・心理学研究紀要，**14**, 77-84.

Higgins, E. T. 1987 Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, **94**, 319-340.

Higgins, E. T., Klein, R., & Strauman, T. 1985 Self-concept discrepancy theory: A psychological model for distinguishing among different aspects of depression and anxiety. *Social Cognition*, **3**, 51-76.

リアリー，M. R. 生和秀敏（監訳）1990 対人不安 北大路書房
（Leary, M. R. 1983 *Understanding social anxiety*. Beverly Hills, CA: Sage.）

溝上慎一 1999 自己の基礎理論―実証的心理学のパラダイム― 金子書房

Moretti, M. M. & Higgins, E. T. 1990 Relating self-discrepancy to self-esteem: The contribution of discrepancy beyond actual-self ratings. *Journal of Experimental Social Psychology*, **26**, 108-123.

押見輝男・渡辺浪二・石川直弘 1985 自己意識尺度の検討 立教大学心理学科研究年報（立教大学文学部心理学研究室），**28**, 1-15.

Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.

Scheier, M. F., & Carver, C. S. 1977 Self-focused attention and the experience of emotion: Attraction, repulsion, elation, and depression. *Journal of Personality and Social Psychology,* **35**, 625-636.

Scheier, M. F., Carver, C. S., & Gibbons, F. X. 1979 Self-directed attention, awareness of bodily states, and

suggestibility. *Journal of Personality and Social Psychology,* **37**, 1576-1588.

Schlenker, B. R., & Weigold, M. F. 1990 Self-consciousness and self-presentation: Being autonomous versus appearing autonomous. *Journal of Personality and Social Psychology,* **59**, 820-828.

菅佐和子　1975　Self-Esteemと対他者関係に関する一研究―青年期を対象として―　教育心理学研究，**23**, 224-229.

菅原健介　1984　自意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み　心理学研究，**55**, 184-188.

田中彩栄子・天貝由美子　2003　現実自己―理想自己の差異と自尊感情との関係　大阪大学紀要第Ⅳ部門，**51**, 539-552.

辻平治郎　1993　自己意識と他者意識　北大路書房

山本真理子・松井豊・山成由紀子　1982　認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究，**30**, 64-68.

## 付　録　1
### 自己認知尺度における項目内容

| | | |
|---|---|---|
| 学　業 | P項目 | 頭がよい<br>勤勉である |
| | N項目 | 理解力が劣る<br>知識に乏しい |
| 家族関係 | P項目 | 親孝行である<br>家族を大切にする |
| | N項目 | 家庭内での存在感がない<br>家族の目を気にする |
| 対人関係 | P項目 | 場面に応じた対処<br>友達を大切にする<br>友人から信頼されている<br>よい友人に恵まれている<br>交際関係が広い |
| | N項目 | 人見知りをする<br>友人に迷惑をかけない<br>友人が少ない<br>進んで自分のことを話さない<br>八方美人である |
| パーソナリティ | P項目 | 個性を大事にしている<br>物怖じしない<br>感情豊かである<br>ユーモアがある<br>誠実である |
| | N項目 | 向上をあきらめる<br>物事にあきやすい<br>わがままである<br>自己中心的である<br>陰険である |
| ライフスタイル | P項目 | 自分自身の生き方をもつ<br>充実した余暇を過ごす |
| | N項目 | 時間の使い方を知らない<br>心にゆとりのない生活を送る |
| 資産・物質 | P項目 | お金の使い方が上手<br>物質的なゆとりがある |
| | N項目 | 経済的に苦しい<br>お金の蓄えがない |
| 身　体 | P項目 | 体が健康である<br>ファッションセンスがよい |
| | N項目 | 運動能力が劣る<br>容姿に自信がない |

付 録 2
公的自意識群における自己像間の差異と自尊感情との関係（$N$=235）

| | $M$ | $SD$ | 1. | 2. | 3. | 4. | 5. | 6. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1. 自尊感情 | 3.11 | .73 | | | | | | |
| 2. Dp-Ⅰ | 7.36 | 2.15 | −.46*** | | | | | |
| 3. Dn-Ⅰ | 8.51 | 2.37 | .30*** | .07 | | | | |
| 4. Dp-Ⅱ | 4.38 | 1.55 | −.09 | .34*** | .13* | | | |
| 5. Dn-Ⅱ | 4.66 | 1.63 | −.04 | .29*** | .22** | .69*** | | |
| 6. Dp-Ⅲ | 6.42 | 2.11 | −.30*** | .69*** | .22** | .33*** | .32*** | |
| 7. Dn-Ⅲ | 7.59 | 2.45 | .23*** | .08 | .77*** | .18** | .25*** | .29*** |

注）* $p$ <.05, ** $p$ <.01, *** $p$ <.001

付 録 3
私的自意識群における自己像間の差異と自尊感情との関係（$N$=198）

| | $M$ | $SD$ | 1. | 2. | 3. | 4. | 5. | 6. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1. 自尊感情 | 3.18 | .67 | | | | | | |
| 2. Dp-Ⅰ | 6.61 | 1.92 | −.34*** | | | | | |
| 3. Dn-Ⅰ | 9.05 | 2.53 | .34*** | .14* | | | | |
| 4. Dp-Ⅱ | 4.64 | 1.67 | .24** | .20** | .29*** | | | |
| 5. Dn-Ⅱ | 4.93 | 1.75 | .05 | .22*** | .33*** | .69*** | | |
| 6. Dp-Ⅲ | 5.94 | 1.79 | −.15* | .62*** | .23** | .38*** | .33*** | |
| 7. Dn-Ⅲ | 7.78 | 2.45 | .25*** | .12 | .76*** | .27*** | .31*** | .31*** |

注）* $p$ <.05, ** $p$ <.01, *** $p$ <.001